

おとうとねずみのチロのおはなし

もりやま みやこ
森山 京

ある日、3匹のねずみの兄弟のところへおばあちゃんから手紙が届きました。

それには、こんなことが書いてありました。

新しい毛糸で、お前たちのチョッキを編んでいます。毛糸の色は、赤と青です。

もうすぐ編み上がります。楽しみに待っていてください。

さあ、3匹は大喜び。

「僕は赤がいいな。」

「僕は青が好き。」

「僕は赤と青。」

「チロのは、ないよ。」

チロというのは弟のねずみの名前です。

「そうよ。青いのと赤いのだけよ。」

「そんなことないよ。僕のもあるよ。」

チロは、慌てて言い返しましたが、本当はとても心配でした。

もしかすると、おばあちゃんは、一番小さいチロのことを忘れてしまったかもしれない。

「そうだったら、どうしよう。」

兄さんねずみや姉さんねずみと違って、チロはまだ字が書けません。

だから、手紙でおばあちゃんに頼むこともできないのです。

「そうだ、いいこと考えた。」

「おばあちゃん、……。」

「おばあちゃん、おばあちゃん、おばあちゃん、おばあちゃん……。」

「僕の声が飛んでった。おばあちゃん家へ飛んでった。」

「僕は、チロだよ。」

「チロだよ、チロだよ、チロだよ……。」

チロは大きく口を開け、一番大事なことを言いました。

「僕にもチョッキ、編んでね。」

「編んでね、編んでね、編んでね…。」

何日か 経って、おばあちゃんから 小包が 届きました。

中には 毛糸の チョッキが 3枚 入って いました。

一番 大きいのが、赤。次が、青。小さいのは 赤と 青の 横じまでした。

「あ、しまった。大好き。」

チロは、さっそく チョッキを 着ると、丘の てっぺんへ かけ上りました。

「おばあちゃあん、……。」

「おばあちゃあん、おばあちゃあん、おばあちゃあん、おばあちゃあん……。」

「僕は チロだよ。」

「チロだよ、チロだよ、チロだよ…。」

「しましまの チョッキ」

「チョッキ、チョッキ、チョッキ…」

「ありがとう。」

「ありがとう、ありがとう、ありがとう…。」

「あ、り、が、と、う。」

「とう、とう、とう…。」